

「ヤイロの娘と長血の女（後編）」

マルコの福音書 5:35～43

はじめに

今日の箇所は、前回の続きになります。前回はイエシュアのみもとにヤイロという会堂司がやって来て、死にかけている自分の娘を癒してほしいと懇願したところから始まりました。イエシュアはすぐに娘のいる家に行こうとされましたが、途中、12年もの間長血を患った女性が現れ、イエシュアの着物に触れることで癒されるという出来事が起こりました。これは単なる癒しの奇蹟というだけでなく、神のご計画を表した「型」であることを述べ、このヤイロの娘も長血の女性とともに滅びたイスラエルの家、今日も世界中に離散しているイスラエルの民を指し示していると述べ、これに対する神のご計画が表された出来事であると述べました。私たち日本人はこのイスラエルという国やユダヤ人という民族との関わりがどうしても希薄であるため、たとえ聖書に記されていても、その存在の重要性を理解することが困難です。しかし神のご計画において、この存在は神の御子イエシュアと同じくらい重要と言っても過言ではありません。それは神が神となるためには、神を自分の、自分たちの神とし、神を神と呼び、ただこの御方へののみ聞き従う民の存在が絶対必要不可欠であり、イスラエルの民はその神の民として、神の御意思によって選ばれたからです。この事実、この真理とまた前回の内容を踏まえつつ、今日の箇所を読み進んでまいりましょう。

1. 恐れない

【新改訳 2017】 マルコの福音書

5:35 イエスがまだ話しておられるとき、会堂司の家から人々が来て言った。「お嬢さんは亡くなりました。これ以上、先生を煩わすことがあるでしょうか。」

5:36 イエスはその話をそばで聞き、会堂司に言われた。「恐れなくて、ただ信じていなさい。」

「お嬢さんは亡くなりました。」この言葉、この出来事の中に、国土を失い、滅びてしまった国家としてのイスラエルの「型」が示されていると考えられます。具体的には A.D70 年にローマ帝国によってエルサレムが陥落した事実を指し示していると考えられます。A.D1948 年、今から 71 年前にイスラエルは実に 1800 年以上ぶりに奇蹟的に国家として再建しましたが、未だ首都エルサレムに神殿はなく、それどころかイスラム教の寺院が建ち並び、また多くのユダヤ人が今日もなお世界中に離散したままです。何より前回述べた「十二」という数に象徴されるイスラエルとは本来、アブラハムの子イサクの子ヤコブの 12 人の息子たちからなる十二部族の連合体であり、そしてそれらを束ねる一人の王によって建つ王国、王制国家です。ですから聖書的解釈としては、現在のイスラエルでは、厳密にはまだ再建されたとは言えない状態なのです。それはまるで存在はしていても命がない、身体があっても生きていない、まさにここに記された会堂司の娘のような状態です。ですから「お嬢さんは亡くなりました。」というこの出来事は、今日のイスラエルを指し示した「型」であると考えられます。しかし後述に「その子は死んだのではありません。眠っているのです。」とイエシュアが言われるように、イスラエルは完全に滅び去ってしまったのではなく、彼らに対する神の約束、ご計画は必ず成就することが指し示されていると考えられます。

そしてここでイエシュアが言われた「**恐れなくて、ただ信じていなさい。**」という言葉。今日のイスラエルに対するイエシュアのメッセージであると考えれば、そこにはどんな意味があるのでしょうか。「恐れる」ことをヘブル語でヤーレー(אָרֵר)と言いますが、これは本来、創世記 3:7 に記された、エデンの園で善悪の知識の木の実を食べてしまったアダムが、自分が裸であるということに目が開かれた結果を指しています。

【新改訳 2017】創世記

3:7 こうして、ふたりの目は開かれ、自分たちが裸であることを知った。そこで彼らは、いちじくの葉をつづり合わせて、自分たちのために腰の覆いを作った。

3:9 神である【主】は、人に呼びかけ、彼に言われた。「あなたはどこにいるのか。」

3:10 彼は言った。「私は、あなたの足音を園の中で聞いたので、自分が裸であることを恐れて、身を隠しています。」

人は神の命令に背いて善悪の知識の木から食べるまで、つまり罪を犯すまでは「自分たちが裸であること」を恥ずかしいとは思っていませんでした。(創世記 2:25) このように、恐れること、ヤーレーとは本来人が罪を犯すこと、神に聞き従わないことを指すのです。ですからイエシュアが言われたこの「**恐れなくて**」とは、恐れなくなるということ、つまり罪を犯す前の状態になること、すなわちすべての罪が赦されることを表していると考えられます。

2. 信じる

そして「**ただ信じていなさい。**」という箇所には「信じる」という意味のアーマン(אָמֵן)が使われており、この言葉は本来、イスラエルの父祖アブラハムが、神の彼と彼の子孫に対する約束に対する行為、応答を表した言葉です。

【新改訳 2017】創世記

15:5 そして主は、彼を外に連れ出して言われた。「さあ、天を見上げなさい。星を数えられるなら数えなさい。」さらに言われた。「あなたの子孫は、このようになる。」

15:6 アブラムは【主】を**信じた**。それで、それが彼の義と認められた。

「アブラムは【主】を**信じた。**」ここに聖書で最初のアーマンがあります。「あなたの子孫は、このようになる。」というアブラム、すなわちアブラハムの子孫、イスラエルの民の繁栄と祝福を指し示した言葉が本来のアーマンであり、このような状態、出来事がやがて必ず実現することが、イエシュアの「**ただ信じていなさい。**」という言葉には表されていると考えられます。現在の世界人口はおよそ 75~76 億とされていますが、ユダヤ人の数はそのうちのわずか 0.2%とされています。このように、神の約束はまだ成就していません。これが成就するのは一体いつどのような時なのかが、次からのイエシュアの言動に表されています。

3. 三人の弟子

【新改訳 2017】 マルコの福音書

5:37 イエスは、ペテロとヤコブ、ヤコブの兄弟ヨハネのほかは、だれも自分と一緒に行くのをお許しにならなかった。

「ペテロとヤコブ、ヤコブの兄弟ヨハネ」、この三人の中に神のご計画の完成になくてはならない重要な三つの存在が表されています。まずペテロ(סִימֹן)について、この名はギリシャ語ですが、ヘブル語で表記するとこのようになり、ここに「初子」を意味するペテル(רִבְּרֵן)という言葉を見つけることができます。この最初の言及は出エジプト記 13:2 になります。

【新改訳 2017】 出エジプト記

13:2 「イスラエルの子らの中で最初に胎を開く長子はみな、人であれ家畜であれ、わたしのために聖別せよ。それは、わたしのものである。」

「最初に胎を開く長子」ここに聖書で最初のベテルがあります。そしてそれは「わたしのもの」神のものであると記されています。この掟は、過ぎ越しの祭りと同様パンの祭りの掟の間に記されています。過ぎ越しのいけにえも、種なしパンもともにイスラエルの罪の赦しのためにささげられる神の御子イエシュア、すなわちイエシュアの十字架の死を指し示しています。ですからこの「最初に胎を開く長子」もまたイエシュアを指し示していると考えられます。つまりイエシュアがここでペテロを選ばれた理由は、彼の中に神のご計画におけるご自分の存在を示すためであったと考えられます。そして「ヤコブ、ヤコブの兄弟ヨハネ」については、神の選びの民としてのイスラエルと、それにつながる異邦人（教会）を指し示す「型」としての存在であると考えられます。「ヤコブ」という名がイスラエルという名を直接的に指し示すものであることは以下の御言葉から明らかです。

【新改訳 2017】 創世記

35:10 神は彼に仰せられた。「あなたの名はヤコブである。しかし、あなたの名は、もうヤコブとは呼ばれない。イスラエルが、あなたの名となるからだ。」こうして神は彼の名をイスラエルと呼ばれた。

そして「ヤコブの兄弟ヨハネ」については、常に単なる「ヨハネ」ではなく「ヤコブの兄弟ヨハネ」であることが強調されていることから、「ヤコブ」が指し示す神の民イスラエルの兄弟となる、つながる存在が指し示されていると考えられるため、ここに私たち異邦人の教会の「型」が表されていると考えられるわけです。このように、「神の国、御国」と呼ばれる神のご計画の完成は、イスラエルの罪の贖いとしてのイエシュアによって、罪赦されたイスラエルの民と、それにつながる異邦人の教会だけがそこに入ることが許され、それ以外の存在は入ることができないということが「ほかは、だれも自分と一緒に行くのをお許しにならなかった。」という記述に表された神のご計画であると考えられます。

4. 取り乱す者たち

【新改訳 2017】 マルコの福音書

5:38 彼らは会堂司の家に着いた。イエスは、人々が取り乱して、大声で泣いたりわめいたりしているのを見て、

5:39 中に入って、彼らにこう言われた。「どうして取り乱したり、泣いたりしているのですか。その子は死んだものではありません。眠っているのです。」

5:40 人々はイエスをあざ笑った。しかし、イエスは皆を外に出し、子どもの父と母と、ご自分の供の者たちだけを連れて、その子のいるところに入って行かれた。

イエシュアたちが会堂司の家に着くと、そこには「取り乱して、大声で泣いたりわめいたりしている」人々がいました。ここに「騒ぎ立てる」という意味のフォーム(**רָוַח**)という言葉が使われており、最初の言及は申命記 7:23 です。

【新改訳 2017】 申命記

7:23 あなたの神、【主】が彼らをあなたに渡し、彼らを大いにかき乱し、ついに彼らは根絶やしにされる。

これはエジプトの奴隷状態から解放されたイスラエルの民が、約束の地カナンに入る時のために、神がイスラエルに語られた御言葉の一節です。カナンの先住民たちはみな異教の神々を信じる者たちでした。神は彼らを「かき乱し…根絶やしにされる。」と言われ、ここに聖書で最初のフォームが使われています。ですからこの会堂司の家にいた人々とは、異教の神々を信じる人々、すなわちイスラエルの神、またイエシュアに聞き従わない人々のことを表していると考えられます。そして彼らはイエシュアを「あざ笑った」とも記されています。ここに使われているサーハク(**קִּיץ**)という言葉は本来、イスラエルの士師サムソンを貶め、物笑いにしたイスラエルの宿敵ペリシテ人の行為を指した言葉です。(士師記 16:25) このような、神を恐れない、イエシュアをあざ笑う者たちは決して「神の国」には入れません。皆この地上から追い出されます。それが「イエスは皆を外に出し」と記されたこの行為の中に、神のご計画として表されていると考えられます。ちなみにここで使われている「出て行く」という意味のヤーツァー(**יָצָא**)は、その最初の言及である創世記 1:12 から本来、その種類に従って分けるという意味合いがあると考えられ、これは神のご計画において、神のものとそうでないものとを分ける、すなわち救われる者と滅びる者にとに裁くことを指し示す言葉であると考えられます。

5. 起きなさい

【新改訳 2017】 マルコの福音書

5:41 そして、子どもの手を取って言われた。「タリタ、クム。」訳すと、「少女よ、あなたに言う。起きなさい」という意味である。

5:42 すると、少女はすぐに起き上がり、歩き始めた。彼女は十二歳であった。それを見るや、人々は口もきけないほどに驚いた。

5:43 イエスは、このことをだれにも知らせないようにと厳しくお命じになり、また、少女に食べ物を与えるように言われた。

イエシュアは「眠っている」会堂司の娘に向かって「起きなさい」と言われ、ヘブル語でクーム(קום)という言葉が使われました。この言葉の最初の言及は創世記 4:8 です。

【新改訳 2017】創世記

4:8 カインは弟アベルを誘い出した。二人が野にいたとき、カインは弟アベルに襲いかかって殺した。

これは人類史上最初の殺人と言われる出来事です。アダムの息子カインは、その弟であるアベルに「襲いかかって殺した。」とあり、ここに聖書で最初のクームが使われています。このように、クームとは本来、人を殺すこと、しかも自分の兄弟を殺すことを指し示しているのです。この会堂司の娘はイスラエルの民、ユダヤ人の「型」であると述べました。彼らが殺す自分の兄弟とは、やはりユダヤ人としてお生まれになったイエシュアのことであると考えられます。イエシュアが殺されること、その死は、イスラエルとそれにつながる異邦人の罪の贖い、赦し、つまり救いのためには絶対必要不可欠な出来事であり、イエシュアの十字架の死は神の定められたご計画の重要な一部なのです。ですから「すると、少女はすぐに起き上がり」という記述にはイエシュアがユダヤ人たちの企みによって殺されることが指し示されていると考えられます。そしてその後の少女が「歩き始めた。」という出来事は、先に述べたイスラエルが世界中に離散させられていく出来事を表しているのです。ここに使われているハーフ(חֶלֶף)という言葉は創世記 2:13 に最初の言及があり、本来はエデンの園から出た一つの川が四つに分かれ「流れていた」ことを意味する言葉で、世界の四方に散らされた彼らの姿がここに重なります。ちなみに、アベルにクーム「襲いかかって」殺したカインも、その後「地上をさまよい歩くさらい人」(創世記 4:14) となったと記されています。また「それを見るや、人々は口もきけないほどに驚いた。」ともありますが、ここに使われている「戦慄、恐怖」を意味するシャンマー(חֶמָּוּ)もまたイスラエルについての同様の出来事を指し示していると考えられます。

【新改訳 2017】申命記

28:15 しかし、もしあなたの神、【主】の御声に聞き従わず、私が今日あなたに命じる、主のすべての命令と掟を守り行わないなら、次のすべてののろいがあなたに臨み、あなたをとらえる。

28:16 あなたは町にあってものろわれ、野にあってものろわれる。

28:36 【主】は、あなたと、あなたが自分の上に立てた王とを、あなたも、あなたの先祖たちも知らなかった国に行かせる。あなたはそこで木や石の、ほかの神々に仕える。

28:37 【主】があなたを追いやられる先の、あらゆる民の間で、あなたは恐怖のもと、物笑いの種、なぶりものとなる。

これはイスラエルの民が神に聞き従わなかった際に、彼らに起こることについての御言葉ですが、ここに「あなたも、あなたの先祖たちも知らなかった国に行かせる。」と語られ、さらに「【主】があなたを追いやられる先の、あらゆる民の間で、あなたは恐怖のもと、物笑いの種、なぶりものとなる。」ことが語られており、ここに聖書で最初のシャンマーが使われています。このように、イスラエルの民は、神の選びの民でありながら、いやそうであるがゆえに過酷な厳しい道を通らねばならないことが、この

「少女はすぐに起き上がり、歩き始めた。彼女は十二歳であった。それを見るや、人々は口もきけないほどに驚いた。」という記述、出来事には表されていると考えられます。

6. 厳しい命令

【新改訳 2017】 マルコの福音書

5:43 イエスは、このことをだれにも知らせないようにと厳しくお命じになり、また、少女に食べ物を与えるように言われた。

しかしそんなイスラエルの民も、最後には「神の国」に入り、その祝福に与ります。それが「少女に食べ物を与えるように言われた。」という記述に表されていると考えられます。ここに使われている「食べる」ことを意味するアーハル(אָהַר)は本来、エデンの園にある木の実を指す言葉です。

【新改訳 2017】 創世記

2:15 神である【主】は人を連れて来て、エデンの園に置き、そこを耕させ、また守らせた。

2:16 神である【主】は人に命じられた。「あなたは園のどの木からでも思いのまま食べてよい。

このようにアーハルとは本来、エデンの園に置かれた者にものみ与えられる楽しみ、喜びの特権を指し示す言葉であると考えられます。このエデンの園の回復とも言うべき「神の国」において、イスラエルの民にこのような特権が与えられることがこの「少女に食べ物を与えるように言われた。」という記述に表された神のご計画であると考えられます。

またイエシュアはここに起こった出来事を「だれにも知らせないようにと厳しくお命じになりました。それはこの出来事には、神のご計画の完成である「神の国」が表されており、それは誰でもが受け取れるものではなく、イエシュアがお許しになった者だけが、神がお選びになった者だけが受け取ることができる、「神の国」に入ることができるというものだからです。またこれは人の側の意志、選択によるものではなく、すべてただ神の御心によるもの、その主権による選択によるものであるということが強調された記述でもあると考えられます。会堂司ヤイロの家に、彼の娘が生き返らされた奇蹟の現場にいたことができたのは、イエシュアがお許しになった者たちだけでした。その者たちの意思選択によったものではありません。ただイエシュアがお選びになったからです。

このように、神のご計画とは、神が誰を選び、誰を救うのかというものであり、そして一度神がお選びになった者は、たとえ神に逆らおうとも連れ戻し、たとえ死んでも生き返らせてご自分のものとする、という神の神としての強い意志の現れであると言えます。そしてその具体的な存在がイスラエルです。神は彼らをお選びになったがゆえに、彼らを決してお見捨てになりません。神は必ずこのイスラエルの民によって「神の国」をお建てになります。その事実がこのヤイロの娘、また長血の女の癒しの奇蹟には表されていると考えられます。

またその事実と私たちが決して無関係ではないことも表されていました。ペテロ、ヤコブとともに家に入ることが許された「ヤコブの兄弟ヨハネ」、この存在に私たち教会の姿を見ることができました。イスラエルの、ヘブル語の視点で見ても、神のご計画の中には、私たちが確かに組み込まれているのです。この選び、救いの約束に与っていることを、今日も喜び、感謝し、主をほめたたえましょう。